先生を独り占め

苺タルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
先生を独り占め

【Ｎコード】
Ｎ９８５９Ｃ

【作者名】
苺タルト

【あらすじ】
初恋の相手が先生！でも、ミス清南の亜理紗と噂が・・・。

第1話（前書き）

架空でっせ。
テニスはソフトテニスで書いてます。

第1話

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

鳴っちゃう！
鳴っちゃう！
チャイム鳴っちゃうぅ～！

ガラガラガラっ！

“キーンコーンカーンコーン”

「セーフ！」
「アウト。」

げっ！
先生もう着てるし・・・。

「セーフでしょ！」
「俺がいるからアウト。」
「そんなぁ。」

頑張って走ったのに。
ふてくされながら席に着いた。
今日は、大好きなコーンクリームスープ我慢して半分しか飲んでこなかったのに！

はい！

あたしは花田香(はなだかおり)。
ここ、私立清南高校の3年。
性格は無関心・無気力・ぶきっちょ。
低血圧なのが欠点。
こうしてほぼ毎日遅刻ギリギリで登校してます。

「おはよ。」

と、声をかけてきたのはあたしの前の席で幼稚園からの親友、まぁこ。

「おはよ！今日はダメでした。」
「花は、今月何回遅刻してるんだ？あと1回遅刻したら1週間一人で掃除当番だからな。」
「えぇぇぇぇぇ！」
「嫌なら遅刻しなけりゃいいんだ。」

う・・・ごもっとも。

「では、始める。今年の体育祭だが、最後にテニス部の引退試合をやることになった。」

すると、いっせいにクラスの男子が騒ぎ出した。

それもそう。

なんてったって、我が校の女子軟式テニス部エースは、ミス清南。
有名雑誌のモデルにでてる超―美人なんだ。
そんで、インハイで個人ベスト8でしょ。
そして、あたしのライバルでもある。

一度も勝てたことないんだ。

なんでも、テニスはアニメのドラマ化で密かなブーム。
ミス清南でモデルである亜理紗がテニス部にエースでインハイ出たとなれば、盛り上がる・・・出席率高くなる（笑、と先生たちが考えたんだって。

でもね。

「うちのクラスからは、花が出る。」
「えぇぇぇぇ？？」

そうなんです、うちの高校って校庭狭いから学校の離れにコートがあるんだ。
だから誰がテニス部かなんて言わなきゃわかんない。
これでも県大会優勝して朝礼台立ってるんですけど！
でも、これも亜理紗のおかげであたしらなんて陰ですわ（涙。

「何、花田ってテニス部だったの？」

一人の男子が言った。

「うん。」
「みんな知らないだろうけど、花もレギュラーだぞ。応援しに行こうな。」

さらにみんなをびっくりさせた模様。

「じゃぁ、亜理紗と・・・」
「同じチーム」

あたしが言うと、
「紹介してくれ！」
「これから仲良くしよう！」
だって。
これだからうちの男子はダメなのよ。
「花、どんな感じで試合やるか聞いてるか？」
「はい、トーナメント戦で体育祭までに準々決勝まで終わらせて、当日に準決勝と決勝を男女やります。」
「そうか。準決勝まで残れそうか？」
「はい。」
「頑張れよ。遅刻もな。」
「はぁ・・・」

担任の先生は、朝霧　拓真先生。
２７歳で一番若い。
実年齢より若くみえる童顔で、いつもＹシャツにニットのアーガイル柄のベストきている。
ネクタイの趣味もいい！って女の子から大人気。
誰にでも勝手にあだ名で呼ぶ。
男女共に生徒に人気があるんだ。
授業も楽しいしね。
だから居眠りする生徒はほとんどいない。
ＨＲ終わった今も先生の周りにはたくさん女の子がいる。
あたしはそれに交じることないの。
よくわかんないの。そういうの。

タイプじゃないってのもあるけど。

その前に・・・“恋”ってしたことないんだよね。
生まれて１８年好きな男の子ってできたことないの。
親友のまぁこが「そんなのもったいない！」って言う。
たしかにもったいない。
学園ラブも今年が最後だもん。

男子が嫌いとかじゃないんだよ！
話すし、男テニと。
男友達だっている！・・・男テニと。
遊んだりだってするんだよ！
・・・・男テニと。
男テニばっかじゃん（涙
あたしの青春は部活で終わるの？

そんなことより！
あたしには明日から朝霧先生ＶＳあたしの遅刻バトルがある。
翌朝から、走って走って走りまくる。
今のとこギリギリセーフで遅刻は免れているよ。

「かぉ頑張ってるじゃん！」

まぁこはあたしのこと“かぉ”って呼ぶの。

「１週間一人で掃除当番なんてマジ嫌だもん。」
「まぁねぇ。走ってくる様は男っぽいし！なんとかなんないの？」

確かに！
体系は、がっちりしてないけど体育会系。

でも髪型はロングなんだよ。
いつもてっぺんでおだんごにしてるの。
おまけに大食い。
整理整頓大嫌い！
男テニとも仲がいいのはサバサバした性格だから。
女としてみてないんだって。
それであたしはいいと思うけどね！

順調にいってた3日間なんだけど・・・。

4日目の朝。
いつものように走ってると、すれ違った人とぶつかったおばあちゃんが、よろけて並べてあった自転車をドミノ倒しにしちゃったの。

こんなときに！

ぶつかった人は無視して行っちゃった。
見過ごすこと出来なかったから、自転車直し始めたの。
みんなイソイソと駅に向かっていく。
見てみぬ振り。

あたしだって急いでるのよ！

「あなた、学校じゃないの？」

おばあちゃんが心配そうに聞いてくる。

「いいよ、おばあちゃん一人で全部は無理だよ。怪我なくてよかったね。」

全部並び終えるのに15分もかかちゃった。
大変！
遅刻決定ぢゃん。

「じゃぁ、あばあちゃん気をつけてね。」
「お名前教えてくれません？」
「時間ないの。」
「学校は・・・」
「清南、じゃね！」

遅刻決定だけど、最後まで諦めないよ！
でも、下駄箱に到達した頃にはチャイム鳴ってて。
先生に事情言っても言い訳は受け入れてもらえず。
遅刻は遅刻ですからね・・・。

「花が今日から1週間掃除当番だからな、みんな帰っていいぞ。」

一斉に拍手が沸いた。

「花田悪いなぁ！」

男子が嬉しいそうに言ってくる。

「悪いと思うなら手伝え！」

あたしが言うと、

「それはだめだ。罰にならんだろう。」

先生が言った。

第1話（後書き）

苺、ソフトテニス部やってました！！
うろ覚えなんですが・・・資料集めてかいてみますた。
全国レベルのボールが重いかなんて経験したことありませんが・・・

第2話

こうしてあたしの一人掃除当番が始まった。
一人で広い教室の掃除。
掃き掃除、床の雑巾がけ、黒板、机を並べ・・・
もういやぁ！

でもね、3日目の掃除中のこと。

「ごめん！遅くなった。」

朝霧先生が教室にやってきたの。

「何が？」
「いくらなんでも机とかまで一人でやらせるつもりはなかったよ。
ただ、ここ二日間は手が離せなくて。ごめんな。」

先生が今までに見たことないような優しい顔してる。
でも、よく考えりゃ先生の顔ってこんな近くでまじまじ見たことないかも。
実年齢より若く見える先生の顔。
こんな優しい顔もするんだ。
先生ね、普段あんまり話す機会がないからって、いろいろお話してくれたの。
あたしの授業態度とか・・・なんか個人面談みたい。

「花は進路どうすんだ？」
「一応、進学ですけど。」

「花の成績ならある程度の大学なら大丈夫だろ。」
「ほんと？」
「遅刻さえなきゃ完璧！」
ですよねぇ・・・（汗）
「がんばります。」
あたしだってしたくてしてるわけじゃないんだよ・・・。
シュン・・
ポン。
先生あたしの頭に手を乗っけた。
トキン・・
トキン・・
何？今の。
「そう、ヘコむな！俺も起きれない一人だ。」
黒板を掃除し始めた。
「うそぉ？」
「あぁ。高校生の時、やっぱ一人で掃除当番やらされたよ。」
そうだったんだ。
あたしも変われるのかな。

「よしっ！終わり。」
「ありがとうございました。」
「はい、ご褒美。」

先生、カバンの中からパックのジュース取り出してあたしにくれたの。

「いいんですか！わーい。」

先生が微笑んで、

「また明日な。」

って言って教室を出ていった。

なんか先生思ったよりいい人！
知らなかった。
掃除の時間、案外いいかも♪

４日目の放課後。
また途中から先生が手伝いにきてくれたんだ。
床の雑巾がけしてるとき、前見てなくてそのまま壁に激突したんだよね。

「いったぁ～」

頭をさすってると、人の気配がして見上げたの。
扉のとこで目が点になってる先生が立ってたの！

「見た？」

あたしが言うと、吹き出してゲラゲラ腹抱えて笑い始めた。

「見た！お前面白いなぁ！」

「一生懸命やってたの！笑わなくたっていいじゃん！」

あたしが顔真っ赤にして言うと、先生がしゃがんであたしの頭をナデナデ。

先生の大きな手があたしの頭をすっぽり覆いかぶさる。

トキン・・

トキン・・

まただ！

何これ！！

不整脈？

「そうだな。ごめん。」

「う、うん」

急に真面目に謝る。

なんか調子狂うな。

「花のテニスする姿、楽しみにしてんだ。」

「え～！なんで？」

「壁に突進して雑巾がけするくらいだもんな、どんなプレイすんのかなって。」

うわぁ、むかつく。
先生、超―いじめっ子の顔して楽しそうに言うんだよ。
「びっくりするよ、あまりにかっこよくて。」
「そりゃ楽しみだ。」
先生が机を運びだした。
あたしも机を運んで並べた。
「今日は、机が終わったら帰っていいぞ。」
「え？いいの？」
「うん。思ったより綺麗にしてくれてるからな。明日もよろしく。」
「はぁ～い。」
先生、実は優しい人だったんだ。
これが人気の理由か。
あたしだけ知らなかったのかな・・・。
なんか胃の辺りがぎゅぅ～ってなる。
なんだろう？

「はぁ～」
「はぁ～って・・・かおり？」
ママが眉間にしわ寄せて言った。
「ん？」
「ご飯進んでないみたいだけど。」

「え？」

見ると、全然夕飯に手をつけてない。

「おいしくない？それとも具合でも悪い？」

「まさか！なんでもないよ！」

大食いのあたしがご飯に手をつけてないんじゃ、そりゃ心配するよね。

「そう？ならいいけど。心配事あるなら言いなさいね。」

「うん」

この家にはママとあたし二人だけなんだ。

パパが早くに病気で死んじゃって。

ママとは友達みたいな関係なんだよ！

「もしかして、好きな人できた？」

ママが目を輝かして言った。

「え？なんで！」

「ため息ばっかりついてるから。恋わずらいかと思ったの。」

“恋”

先生に恋？

「ねぇ、ママってパパのこと好きになる前、他にも好きな人っていたんだよね？」

「そうねぇ。初恋は小学生だったから、たくさん恋したわよ。」
「へぇ！その中に年上とか、先生とかいた？」
「かおり、やっぱり好きな人できたのね！」
「へ？いや！友達が・・・ね！」
「高校生のとき、担任の先生のこと好きになったわ。」
「ママも？」
「かおりも？」
「うん・・・あ・・・」

ママ微笑んでる。
あたし慌てて、

「でもね、まだわかんないの！好きなのかなんなのか。」
「そうなの？」
「だって、特にタイプじゃないし、掃除手伝ってもらっただけだし。」
「好きになるのに理由はいらないわ。」

あたしはママを見た。

「そんなもんじゃない？昨日までなんとも思ってなかった人なのに、なんかのきっかけで好きなるって。」
「そうなのかなぁ。」
「理想の恋と現実の恋は違うものよ。かおりから恋の話し聞けて嬉しいわ！」

ママは嬉しそうにお茶を飲んだ。

お部屋に戻って明日の準備を始めた。

“理想と現実は違う”かぁ・・・。

今まで先生と絡みがあるとしたら、“遅刻”のこと。
それ以外、この掃除当番がなかったら卒業まで先生と絡むことなかったんじゃないかな。
これが“きっかけ”。
恋って突然やってくるものなのね！

明日の時間割・・・
明日金曜日か。
はっ！
明日で掃除当番最終日じゃん。
明日で先生と掃除するの最後・・・。
今日が金曜だったらよかったのに！
遅刻した日が火曜だったらよかったのに！
はぁ～。
このがっかりなキモチも“恋”してるからなの？

第3話

翌日。

いつものように先生の周りには女子でいっぱい。
あれ教えて、これ教えて、これってどぉなんですかぁ？
って。
先生一人一人ちゃんと答えてあげてる。
優しい顔で。

むぅ～・・・。

でも、その中には入っていけないの。

「か・ぉ～！」

まぁこに呼ばれて我に返った。

「ん？」
「かぉ、変。」
「え？」
「え？じゃないよ。明後日の方向いっちゃってたよ。」
「そう？」
「そう！なんかあった？」

まだまぁこには言ってないんだ。
先生が好きなこと。

「ないないない！」

「そぉお？」

疑ってる・・・。

「な・い！」

「ならいいけど。そうそう！亜理紗って、朝霧先生狙いみたいよ！」

「え？そうなの？」

「結構、押してるみたい。先生も満更でもないらしいよ。」

「マジ？」

うそぉー！

テニスでもライバルなのに“恋”でもライバルですか。

相手が亜理紗じゃ、勝ち目ないじゃん・・・。

「え？満更でもない？」

聞き流しちゃうとこだった！

「うん。何度か学校の外で二人でいるとこ見られてるの。」

そうなんだ・・・つかショックです。

確かにイケメンに美女だもん、お似合いです。

「でもね、もうひとつの噂じゃ、亜理紗が無理やり呼び出してるって。

先生と生徒がいくらプライベートでも外で会うのはまずいじゃん。

朝霧先生だってバカじゃないから断ってるんだって。

でも、いろんな理由つけて呼び出してるみたい。先生も嫌々出向いてるって。」

「そうだよね！」

「急に声でかくなったね・・・。やぱ変。」
「あははは。」

危ない危ない。
つい心の声が口から出てしまった。
先生は亜理紗のこと好きかもしれないんだ。

はぁ～あ。

放課後、一人でいつも通り掃除してると、先生が教室に入ってきて、

「やってるな！お待たせ。」

手伝いにきてくれたの。

「はぁ、すみません、毎日。」

なんて返したらいいかわかんなくて。

「なんだ？元気ないな。」
「そうでもないです。ピンピンしてますよ。」
「そうは見えないけどなぁ。今日で最後だな。」
「はい。」
「よく頑張りました。遅刻も減ったしな！よかった。」

ドキッとする先生の笑み。

またその顔する・・・
ずるいよ・・・先生。

「・・・そうですね。」

机を持って後ろ向きに歩くと、しまい忘れた箒に足をひっかけちゃって、

「きゃっ！」

「危ないっ」

倒れそうになったとこを先生が間一髪であたしを後ろから支えてくれた。

「お前・・・気をつけろよ！」

「すみませ・・・」

あたしの手に先生の手が重なってる・・・

ボッと顔が急に熱くなって、机をつかんでる手離しちゃった。

ドンっ！

「おぃ、大丈夫か？やっぱし今日の花おかしいな。どうした？」

「どーもしない。」

「どーもしなくなくない。」

もう、どうしろって言うの・・・。

あたし、目線反らして黙っちゃった。

「花？」

「じゃぁ、言います。優しくしないでください。先生のこと好きになっちゃう。遅刻減ったのなんかちっとも嬉しくない。先生と掃除できなくなるもん。」

ヤケクソだった。
あたしは黙って机を運びだした。
先生も黙ったまま・・・。
困ったよね。
生徒からそんなこと言われたら。

「かぉ！」

微妙な空気の中、男テニの村上祐一が教室を覗いた。

「祐一、何？」
「ホントに一人で掃除やってんの？」
「うん、途中から先生が手伝ってくれるけど。」
「先生、あんまりかぉを甘やかすなよ（笑）一人で十分できますから！」

先生も苦笑い。

「何それ。そんで用は？」
「なぁ、この後打ち合いしないか？コート空いてるって。」

祐一からのテニスのお誘いだった。

「する！掃除終わったら行くから。」
「おぅ！先行ってるわ。先生さよなら！」
「おぉ！さよなら！」
「まったく失礼な奴。」
「そうだな。」

あれ？
なんかテンション変わった？
「もう行っていいぞ。」
なんか・・・怒ってる？
「でも・・・」
「今日で最後だから、いいぞ。練習してこい。」
「・・・・はい。さようなら。」
「おっ、頑張ってこいよ。」

あたしは教室を飛び出してった。
先生困ったよね。
たかだか掃除手伝っただけで告白されちゃ。
あんなこと言われたら一緒に居づらいよね。

あたしの・・・バカ。

涙がポロポロ出てくる。
これが“切ない”とか、“苦しい”とかなの？
“恋”って難しいよ。

部室で着替えてコートへ行く。
学校とコートが離れててよかったよ。
鏡でチェックしたら目が赤いのなくなってた。

「おっ、早いじゃん。」

素振りしていた祐一がこっちにきた。

「うん、先生が行っていいって。」

「そっか。早くアップしてこいよ。」

「うん。」

あたしは専用コートの周りを走りだした。

「俺も付き合う。」

祐一がついてきた。

「疲れちゃうよ。」

「かぉ待ってたら、体が冷えそうだからな。」

「ごめん。」

「謝るなよ、気持ち悪りぃな。」

祐一が言った。

「まぁさ、あれだよ。人を好きになることはいいことだ。」

「何言ってんの。」

「たとえ相手が先生だとしてもさ。」

「なんで知ってんのよ。」

「あんなでかい声で話されちゃ、聞きたくなくても聞こえるわ。」

祐一は苦笑いして言った。

あ・・・あたしつい興奮して・・・。

通りかかった祐一にも聞こえてたんだ。
なんて失態。

「あたしなんてことを・・・そりゃ先生、困った顔するよね。」
「それで泣いてたのか？」
「なんで知ってんの！」
「顔見りゃわかるよ。明らかにさっきと違うじゃねぇか。」

大丈夫だと思ったのに。
なんだか祐一に全部見透かされてるみたい。

「たかだか、掃除手伝ったくらいで好きになられちゃ、先生も困るかなって。
こいつどんだけ勘違いヤローだよって思われちゃったかなって。」
「そんなこと思わねぇよ。少なくとも俺はな。」

こういうときの祐一だ。
いい奴。
試合で負けたときも、いつも泣きやむまで付き合ってくれるんだ。

「サンキュー祐一。」
「おぅよ。」

祐一は少し嬉しそうだった。

「お前らいつまで走ってんだよ！」

コートで祐一の相棒と、あたしの相棒のなっちゃんが呼んでいる。

「今行く！かぉ、ダッシュ！」

「ＯＫ！」

ダッシュしたら、なんかすっきりした！

第４話

この練習はね、決勝で亜理紗たちに勝つための練習。
つっても、決勝に残らないとダメなんだけどね（笑

インハイ上位の子のボールって重いの。
亜理紗のボールもすっごい重い。
普段から亜理紗と打ち合ってれば慣れるかもしれないけど、なんせプロのコーチが専属でついてるから一緒に練習なんてしないの。
だから、あたしらは男子に相手になってもらってレベルアップをするのです！
あたしは後衛だからあまりないけど、前衛のなっちゃんなんか男子のボールが顔に当たると真っ赤になるんだよ。
でも、これさえ克服すれば亜理紗たちのボールなんて怖くない！
祐一たちと仲がよくてよかったよ。
しばらく試合形式で打ち合って、休憩に入ったとき、

「拓真先生！」

亜理紗がコートにやってきた先生に近づいていった。

「どうされたんです？」

亜理紗と先生が楽しそうに話すとこなんて見たくない。
わざと気づかない振りした。

「かぉ！乱打やろ。」

祐一がラケット取ってあたしのことをコートに引き戻した。

「うん」

祐一、いつも以上に凄いボール打ってきた。
手首がしびれる。

「重いっ！」
「文句言うな！俺は男だぞ！」
「何わけわかんないことといってんのよ！」

思わず吹き出しちゃう。

「こんくらい取れよ！男だろ！」
「あたしはおんなだぁ！」
「きこえねぇなぁ！行くぞ！」

めっさフラットでサーブを打ってきた。
変化入れてないから、力の分スピードも重さもかかる。

「ぎゃぁぁぁー！」
「避けるな！」

横で相棒達がゲラゲラ笑ってる。

「次は取る！」
「取ってみろ！」

祐一は高くトスを上げる。

パコーンっ！

おもいっきり振り切ったラケットから放たれたサーブがあたしんとこに向かってくる。

取れる！
つか取る！

「んえぃっ！」

見事ＨＩＴ！

「やったぁ！」
「すげぇ！花田やったじゃん！」
「かおりすごーい！」
「やればできんじゃん！」

祐一が頭をナデた。

「いぇ～い！タイミングつかんだもんね♪」

ふっとコートの外見ると、もう先生はいなくなっていた。

よかった。
祐一に今度なんかおごってやんなきゃね！

でも、こんときはこんときなんだ。
一人になればたくさん考えちゃう。
お家に帰って、居間で紅茶飲んでくつろいでいるママに、

「ママ・・・」
「なぁに？」
「ママは好きだった先生に告白した？」
「したわよ。」

あっさり言ってくれる。

「迷惑じゃないかとか考えなかった？彼女いるかもしんないし、誰にでも優しいかもしれないのに。」
「もちろん考えたよ。でもママは相手の迷惑より、言わないで後悔するのが嫌だったの。それはどんな恋でも一緒よ。振られたっていいの。“好き”って言うことはすごいことなのよ！」

ママって凄い！
尊敬しちゃうよ。

「そうだね。で、その先生の返事は？」
「ふふふ。」

ママ、笑うだけで言わない。

「何？」
「フられてたら、かおりは今存在しないわね。」

え？

「えぇぇぇぇぇー？パパ？」

ママはにっこり。

「すごーい！」

パパは昔教師だったんだって。
ママと恋に落ちて、それが学校にバレて教師やめたんだって。
そのせいでママの親にもバレて二人は別れることに。
ちょっと悲しいお話よね。
でも、パパはどーしてもママと付き合いたくて、普通のサラリーマンとして再就職してママに再び会いに行ったんだって。
ママの親も、パパの情熱に負けてお許しがでたんだって！

すごい素敵なお話！
そうだよね、先生にとっては迷惑だったかもしれないけど、“好き”ってキモチはうそじゃないもん。
変な形で言うことになったけど、言ってよかったんだよね！
まぁ、先生とはママたちみたいなドラマチックなことにはならないだろうけど・・・。

土日は部活。
無事に準決勝まで進んだよ！
体育祭で亜理紗たちと決着つける！

「お疲れ！」

祐一がタオルを首にひっかけてやってきた。

「オツ！」
「決まったな。」
「うん。準決勝に勝たなきゃ話しになんないけどね。」

「そうだな。今日、一緒に帰らないか？」
「いいよ。」
「今、港に豪華客船がきてんだって！見にいかね？」
「うん、いいよ。」
「じゃ、後で。」

祐一は後片付けにコートに戻っていった。

女子はね、部員数半端ないから、片付けようもんなら、

「先輩！私がやります！」って（笑

マッハで後輩がやってくるの。
3年になると片付けやらなくても？いいんだ。

「かおり行こ！」

なっちゃんが、もうウィンドブレーカー羽織ってる。

「うん！」
「体育祭に残れてよかったよね。」

なっちゃんが感激してる。
なっちゃんは、クラスに好きな子がいるから準決勝に残れて嬉しいんだって。
応援しにクラス総出だからね。
好きな彼が応援に来てくれるとなれば、準々決勝までは必死だったんだ。

「頑張って決勝もいかなきゃね！」

「うん！かおり頑張ろうね！」

もう、うちらはミーティングないから、着替えたらそのまま帰れるんだ！

部室になってるプレハブの外に出ると、祐一がラケットバッグ背負って待っていた。

「あれ？早いね。片付けてなかった？」

「片付けてたよ。お前らの着替えがトロいんだよ。」

「まぁ、失礼ね。ねぇ？かおり。」

「ホント。もっと言い方あんでしょうが！」

「女ってなんでこんなに着替えが遅いんだ？」

祐一が首をかしげる。

「女の子なのよ、身だしなみくらいちゃんとしないと。」

あたしが言うと、

「なっちんはわかるけど、なんでかぉが熱く語るんだよ。」

「なんだって？あたしは女だぁ！」

祐一ったらマジで言ってるからね。

「いやぁ、知らなかった。」

「もう、帰る。なっちゃん行こ。」

プィっ。

祐一と行く方向と反対に方向転換。

「おいっ！どっち行くんだよ。冗談だって。」
「知らない。」
「ゴメンって・・・」
あたしの手をつかんだの。
ドキドキドキドキ・・・
友達とはいえ、男の子に手つかまれたのなんて生まれて初めて。
顔が熱くなるのがわかる。
「なななな・・」
「怒んなよ、船見に行こうぜ？」
「何？祐一と港の船見に行くの？」
なっちゃんが目を輝かせた。
「どしたの？」
「豪華客船！ロマンチックよねぇ！行っておいで！祐一ガンバ！あたし先帰るから、じゃぁねぇ～！」
あたしと祐一おいて先に行っちゃった。
「なっちゃん、一緒に行けばいいのに・・・」
「なっちんにもいろいろ用ってのがあんだろ、俺達も行こ！」
「うん。」
あたしたちは電車に乗って、一つ隣の駅で降りたの。
港の公園があるんだ。
木にイルミネーションが取り付けられてて、夜になるとすんごい綺

麗なの！
日が落ちるの早いから、電車降りた頃はもう暗くて木々のイルミネーションがキラキラ。

「キレー！」

あたしがはしゃぐと、

「さっきは悪かったな。女扱いしなくて。」
「何？急に。」
「今、かぉはやっぱし女だってわかった。」
「今って・・・元から女！もぉ～、クラスの男子といい。そんなに女の子っぽくない？」
「テニスやってるときのかぉはなぁ。性格もさっぱりしてるしな。でも、」
「でも？」
「今、イルミネーション見てはしゃぐかぉは女の子だったよ。」
「ホント？」
「うん。」

少し歩くと、大きな船が現れた。
その船もライトアップされて綺麗！
あたしたちは空いてるベンチに座って船を眺めた。

「こんな素敵な船で旅してみたい。」
「なぁ！俺も。」

しばらく沈黙。

「落ち着いたか？」

「何が？」
「先生のこと。」

もしかして、元気づけるために連れてきてくれた？

「うん。ママにいろいろ聞いてもらったらスッキリした。振られたって、“好き”って言うのはすごいことなんだよ！ってママが。」
「うん、俺もそう思う。」
「言わないで後悔するより、よっぽどいいって。」
「そうか。ママさん良い事言ったな。」
「でしょ。」
「じゃぁ、俺も言うかな。」
「祐一、好きな人いたんだ！水臭いなぁ、教えてよ。」
「俺だって好きな奴くらいいるよ。」
「ごめん。頑張ってね！」
「おぅ、かぉに応援されちゃ頑張らなきゃな。今言うわ。」
「今から？祐一、行動力ありすぎ！」

あたし関心しちゃった。

「うん。」

祐一は何故かあたしの方向いて、

「俺はかぉが好きだよ。」

え？
今・・・あたしの名前言った？
しばらくあたしたち静止画だったはず。

「かぉ？」
「あ？あぁ、えーっと。」
「お、おぅ。」
「あたし？」
「そうだね、かぉだよ。」

うそぉ～！
そして生まれて初めて告白されたんですけど！
「女子っとしてみてなかったんでしょ？」
「冗談に決まってんだろ！そうでもしないとかぉと絡めないだろ？」
そうだったんだ・・・。
「返事はいいよ。」
祐一、以外に冷静なの。

「え？」
「だって、かぉは先生が好きなんだし。」
「振られるってわかって？」
「うん。かぉのママさんの言葉に感動して。」
祐一が親指立ててニッと笑った。
“好き”って言葉を言う勇気。
ちゃんと勇気をもらったよ！
「祐一の気持ちは嬉しいよ。ありがと。」
これホント。これはあたしの素直な気持ち。

恋の対象にはならなかったけど、あたしにとって心強い友達だもん。
“好き”って言われて嬉しくないわけない！

「かぉも頑張れよ。」

祐一があたしの頭をグシャグシャグシャってした。

「やめてよぉ！先生もやるんだよ。」
「そりゃ、先生もかぉに気があるんじゃないか？俺はそうだよ。」
「先生はみんなにしてるんじゃない？」
「だったら子供扱いしてるかだな。」

そんなのちょっと嫌。
子供扱いなんて。
眉間にしわ寄せて黙り込むあたしに、

「大丈夫だよ。嫌いな奴にはしないよ。」

祐一はまた頭をナデナデ。
そうかな？
嫌われてはいないって思っていいのかな。

第5話

せっかく祐一やママに元気付けてもらったのにちょっと悲しいことがあったんだ。

それはね、ＨＲ終わったあと、自販機ジュース買いに行くのに廊下出たんだ。
廊下には、先生とクラスの女子がしゃべってて。
何を話してるかはわからないけど、先生の手がその子の頭に。
やっぱし、みんなにしてるんだ。

“子供扱い”

先生がこっち向いた。
あたし、目が合う前に走って自販機に向かった。

苦しい・・・

苦しい・・・

こんなの嫌。

辛くてしんどい。
こんなんなら“恋”なんてしないほうがいい。

もう、魂が抜けちゃったように授業もなんも手につかない。

そんなある日の休み時間。

少し外の空気吸おう。
廊下にでて窓を開けた。
もう、なんもやる気が起きない。

今朝ね。

キーンコーンカーンコーン・・・・
キーンコーンカーンコーン・・

「セーフ！」

ギリギリで教室に入ったの。

「アウト」

先生がいつものように言う。

「・・・」
「なんだ？いつもの突っ込みがないな。テンポ狂うだろ。」
「すみません。」
「今のは冗談だ、今日はセーフ。」
「どうも。」

そう、チャイムと同時だったんだ。
それすら反応できなかった。
先生はいつもどおりにＨＲして、生徒と仲良く話している。
あたしはフツーになんてできないよ。

まぁこがあたしの無気力メーターに異変が出てることにいち早く気づいた。

ＨＲの後、

「かぉ、一体何があったの？こないだから変だよ。」

「まぁこぉー」

あたし、今までのこと話したんだ。

「なんで今まで黙ってたのよ！」

「いろんなことがありすぎて・・・」

「そっかぁ！かぉがついに恋したのか！応援するよ！」

まぁこが嬉しそうに言った。

「でも、迷惑だったぽいし。」

「返事聞いてないんでしょ？」

「まぁ・・・」

「だったらまだ諦めちゃダメ。」

「うん・・・」

自信ないよ・・・

廊下で外を見ながらボォーっとしてると、

「花。」

出席表のボードで頭を叩かれた。

「授業に身が入ってないぞ。」
「すみません。」
「どうした？」

わかってるくせに・・・

「別に。」
「そっか・・・ならいいけどな。」

あたしの頭ナデナデした。
嫌・・・

「やめてください。」

あたし先生の手を振り払ってた。

「花・・・」
「思わせぶりなことするの・・・やめてください。」

逃げるようにあたしトイレに行った。

もう、あたし頑張れないよ。

そのまま授業をさぼった。
屋上に行って、空を見上げてた。

いい天気。
でも、あたしの胸ん中はドシャブリだよ・・・。

「かぉ？」

祐一がこっちに歩いてきた。

「祐一。何してんの？」
「お前こそ。サボり？」
「うん」
「なんかあった？」

祐一が隣に座った。

「なんでもお見通しなんだね。祐一には。」
「付き合い長いからね。それに、かぉのことずっと見てたからわかるよ、悲しいことがあった、嬉しいことがあった、あいつバカだとか。」
「バカは余計。」
「ははっ。元気だせよ、授業サボるなんてかぉらしくないよ。」
「うん、次はでるよ。」
「おぅ。じゃぁ俺もでよっかな。」
「ありがとね、いつも。」
「お安い御用。」

祐一はニィッと笑って言った。

好きになった人が祐一だったらよかったのに・・・

そんなこと思ったりもした。
きっと楽だったんだろうな。

恋は”楽“してするもんじゃないってママがこないだ言ってた。
“楽しく”するんだって。
その中には、辛かったり、苦しかったりってあるけど、最後には“楽しかった”って思えるんだって。
先生に恋したこと、最後には“楽しかった”って思えるよね？

教室に戻ると、まぁこが泣きそうな顔で駆け寄ってきた。
「かぉ！どうしちゃったのかと思ったよ。大丈夫？」
「ごめん・・・心配かけちゃったんだね。」
「あたしより、朝霧先生のほうが心配して学校中探したみたいよ。」
「うそ・・・」
「ホントだよ。もしかしたらまだ探してるかも。」
「そっか・・・」

みんなに悪いことしちゃった。

「花戻ってるか？」

先生が教室に現れた。

「かぉ戻ってきました！」

まぁこが言うと、

「そか！よかった。」

先生はそれだけ言って、教室を出て行った。

「かぉ・・・」

まぁこが心配そうにあたしを見る。

「もう、大丈夫だよ！ゴメンね。」

「ううん、かぉが大丈夫ならいんだよ。」

「ありがと」

今、体育の時間。

体育館でバリボやってるんだ！

「いくよ～！」

「かおりいくよ！それ！」

「おっりゃ～」

バシッ

「さすがかぉ！うちのアタッカーはかぉで決まりだね！」

「打つだけならいくらでもまかせなさい！」

いやぁ！良い汗かいた。

運動最高！

嫌なことも忘れていられる。

教室帰る途中、廊下で亜理紗と先生が話していた。

亜理紗、楽しそう。

まぁこたちと話しながら見てみぬ振りして通過。

気にしない気にしない。

教室に入ると、途端にみんなで先生と亜理紗の話しになった。

「相手が亜理紗じゃねぇ。」
「ホントに付き合ってるのかねぇ！」
「絵になってるもんね。」

そんな会話の中、一人の子が、

「でも、あたしは先生とかおりの漫才が好き。」
「え？あたし？」
「うん。セーフ・アウトのやり取りがすき。」
「あたしもー！いいコンビだよね！」
「うんうん。」
「ど、ども」

いつの間に好評に？
まぁいいか。
ちょっと気分いいかも♪

いよいよ明日は体育祭！
メインは引退試合。
絶対決勝残る！

コンコン・・

「ハイ？」
「入るわよ。」

ママが部屋に洗濯物を持ってきてくれた。

「ありがと！」

「明日、引退試合でしょ？ユニホーム洗っておいたわ。」

「ありがと。」

「あと、グリップテープ買っておいたよ。ラッキーカラーのピンク。」

「ママサンキュー♪」

ママが買ってくるグリップテープは、必ず勝つ！ってジンクスがあるの。

明日勝てる気がしてきた！

「恋も頑張ってくれるといいんだけどね！」

「え？」

「最近、好きな人の話しいてくれないじゃない？」

「あー。いろいろあってね。」

「その方が恋は楽しいのよ。もしかしたらいい方向に進んでるのかもしれないわね。」

ママ、意味不明なこと言って部屋を出て行っちゃった。

「何言ってんの？」

明日、早めに行ってグリップテープを貼ろう。

第6話

いゃぁぁぁぁぁぁ！

なんでこんな大事な日に寝坊？

部室寄って、新しいグリップテープ巻いて外に出ると、祐一も男子更衣室から出てきた。

「祐一おはよ！」

「おぅ！おはよ。なんか置きにきた？」

「ううん、グリップテープ巻きに寄ったの。」

「そっか。またピンク？」

「もちろん！」

「ギリだな。走るぞ！」

「うん！」

「いいアップになるな。」

「ね！」

「かぉはなんの競技出るの？」

「むかで競争。祐一は？」

「借り物競争。」

「お互い頑張ろう。」

「ＯＫ。」

“キーンコーン・・・”

「やべっ、鳴ってる！」

「ダッシュ！」

「じゃ、後でな！」

「うん！」

祐一と別れて教室に入ると、
「アウト」
待ち構えてた先生。
「すみません。」
素直に謝って席に着く。
「今日はどしたの？」
まぁこが聞いてきた。
「部室寄ってきたの。グリップテープ張り替えてた。」
「大事な試合だもんね。」
「そう。」

校庭に出て、開会式。
選手宣誓がなんと祐一と亜理紗だった。

うわ、異色（笑

競技開始！
うちの学校はまさに運動会！
紅白に分かれて競技するんだ。
最初は「ダサーイ」とか言ってても、玉入れなんか気づくとむきになってる（笑）

あたしはまぁこと出たムカデ競争はなんと一位入賞したんだよ！
男子の借り物競争が始まった。
祐一が出るんだっけ。
５番目くらいに出てきた祐一。
スタートダッシュはものすごく早かったのに、メモ見て固まってる。
「祐一どしたんだろ？」
キョロキョロしてあたしの方に走ってきたの。
「ごめん、俺は嘘つけないから。」
「は？」
祐一があたしの手を引っ張って、メモを持たせてお姫様抱っこをしたの。
「ちょっと！何？？」
「メモ見ろよ。」
祐一、あたし抱えて走り出した。
『好きな人をお姫様抱っこ』
「引き強いね。」
「おぅ。」
「今だけ付き合ってやろう。」
「サンキュ。」

祐一の息が上がっている。

「重くてごめんね。」

「ノープロブレム」

ニッと笑ってくれた。

当然1位！

ハイタッチでお互いを祝福。

「助かった！」

「完全にうちら公認カップル？」

ひゅ～ひゅ～言ってるギャラリーに祐一はあたしを引っ張ってガッツポーズ。

「先生には悪いけどな。」

祐一はニッと笑った。

全競技が終わって閉会式。

今年は赤組が勝った。

うちのクラスも赤組だったんだよ！

「よく頑張ったな！」

先生もご満悦そう。

閉会式も済んで、ランチタイム♪

お昼をはさんで引退試合は行われるの。

お腹も満腹になって、いざ、着替えに部室に行きますか！

「まぁこ行くね！」
「うん、頑張って優勝してね！」
まぁこが言うと、みんなも「頑張れー！」って声かけてくれた。
「ありがとう！あとでね！」
教室を出て、階段のところで先生に呼びとめられた。
「花っ！行くのか？」
「はい。」
「うちのクラス代表でもあるんだから、頑張れよ。」
「はい。頑張ります。」
あたしちゃんと目見れなくて、さっさと走って部室に向かった。
洗い立てのユニホームを着て、新しいグリップを握って素振り。
後輩が整備しておいてくれたコートでアップして、軽くボールを打つ。
その頃に、続々と生徒がコートに集まった。
どんくらいがミス清南の“亜理紗”プレーを見にきたんだろ？
「こんな中やるの・・・」
「ギャラリー多すぎ。」
各々に緊張している。
あたしも・・・
だって、うちのクラス一番初めに到着してるし。

校長の話しから始まって、引退試合準決勝まで男女６ペアが紹介された。

第一試合。
ミス清南“亜理紗”ペアの試合から始まった。
全国レベルのボールは、やっぱ対戦ペアには歯が立たないみたいで、あっさり
３―０で圧勝。

そして、第二試合。
いよいよあたしの出番。
あたしがコートにでると、

「花田―！」
「かぉー！」

って声援が上がった。

なんか照れくさいよ。

もう、あらかじめ“トス”はしてあったから、ウィンドブレーカーのまま
コートにはいるいなや、対戦相手としばらく乱打で体をコートになじませる。

一球返すたんび、「おぉ～」「やるぅ～」って（笑

審判の『レディ』って声で乱打をやめて、軽く相手に会釈して相方

に駆け寄る。
相方の手を握って、

「なっちゃん、頑張ろう！」
「うん、すぐそこで見てるの」
「かっこいいとこみ見せるしかないね！」
「うん！せーの、」

“ハイッ”

ギュって握って気合入れんの。
相手が「ボールいきます」って言って先攻のうちらにボールをよこした。

『5ゲームス　マッチ　プレイボール』

審判の開始の合図でいっせいに「さぁこーい」って声をだした。

まずは、あたしのサーブから。
あたしはボールを空に投げた。

“まずはフラット”

力強い振りが、フラットで当たれば、ものすごい勢いでサービスコートに向かっていく。
ボールはサービスコートの角に入った。
相手は少し前のめりになってたけど、しっかりとした返球。
あたしはかまわずシュートボールで返す。
こうしてしばらく後衛の打ち合いが始まった。

あたしのペアはレギュラー。
相手は補欠。

男子相手に打ち合ってるあたしらや、全国クラスの亜理紗たちとの力の差は歴然としていた。
ほとんどあたしに振り回される形で、最後に際どい角にシュートボールを打ち込んで1点。
続いてのサーブはネットにかかってフォルト。
セカンドサーブはアンダーカットサーブ。
ボールにスライス入れてイレギュラーさせるの。
セカンドサーブはね、緩い球だからコントロール自在。
相手がクロスに返してくるか、センターに返ってくるかでどちらが拾うか変わってくるの。
返ってきたボールはセンターより。
前に少し出た前衛のなっちゃんがローボレーに入って返した瞬間、

“決まった”

ってあたしは思ったよ。
その思惑通りに、なっちゃんのボレーに相手の後衛の反応が遅れて拾えなかったの。

『2—0』

今度はなっちゃんのサービスから。
なっちゃんはサウスポー。
カットサーブは強烈。
ネットにかかってあっさり1点。

今日のなっちゃんのカットサーブは絶好調！

次もあっさり1点取っちゃったんだ。

「絶好調じゃん！」

「恋のパワーは凄いの！」

そっか、好きな人が見てるんだもんね。

このセットもあっさり取ったけど、その後もあたしたちの流れにもっていったから、

『3―0』であたしたちの圧勝に終わったの。

決勝進出♪

クラスメイトの拍手で迎えられてベンチに座った。

「花田かっけー。」

「ありがと。」

「ナイスファイト！花田。」

クラスのみんなが声をかけてくれた。

「みんなありがとう！」

「かぉ、相変わらずかっこいい！次も頑張ってね！」

まぁこがタオルを渡してくれた。

「うん。」

遠くの方で先生と目が合った。

親指立ててグゥ～サイン。

パッと目を反らしてしまった。

ダメ！
意識しちゃ。

今度は、男子の試合。
２ペアしかいないから早くも決勝戦。
コートで軽くアップする祐一に、

「祐一、絶対勝って。」
「かぉの前で負けるわけないだろ。３―０で勝ってやる。」
「頑張って！」

祐一は親指立ててコートに入っていった。
祐一は言葉通り３―０で勝ったの。
男子の優勝は祐一のペア。

後輩がコートの整備をしてる間アップをして、クラスの声援を背にコートに入った。
先攻は亜理紗のペアのサーブから。
意外にもあたしたちの優勢の流れだった。
軽く１セット取ってしまったの。
浮かれてもいられないんだけどね・・・。
相手はこの学校１番のペア。
全国クラスだし、プロがついてるから、あたしらなんかとはパワーも場数も違うの。
いとも簡単に１セット取りかえされてしまった。

『1―1』で始まった3セット目。
デュースが続く長い戦い。
どっちもゆずらない対決。

『アドバンテージ　レシーバー』

相手は力強い振りでサーブを打ってきた。
あたしはこのおもた～いサーブをストレートに打ち返してこのセットと勝ち取った。

あまりにも長いセットだったから、5分の休憩が与えられたの。
ベンチで水分補給してると、

「なんで最後はいとも簡単に決まったんだ？」

ってクラスの男子が聞いてきたの。

「うん、サーブが入ってきたとき、軸足をクロスに打つように見せかけて、前衛をクロスに走らせるように仕向けたの。打つギリギリでストレートに変えたから前衛が守りきれなかったんだ。」
「よくわかんないけど、すげぇ～。」
「じゃ、行くわ。」

これでとれれば優勝、とればければ振り出し。

『2―1』

4セット目はあたしのサーブから。
最後に力をとっておきたかったから、選んだサーブは“スライスサーブ”。

速度は落ちるけど、回転がかかってカーブを描いて飛んでいく。
あたしたちもそうだけど、亜理紗のたちもミスが目立ち始めてきた。
“ここが正念場”
あたしはとっておいた体力で得意の“フラットサーブ”に切り替えて力いっぱいラケットを振った。
綺麗にコートに入ったサーブだけど、気持ちよくレシーブも返ってきた。
コーナーギリギリにＩＮしたボールを、ロブで回避。
でもね、そのロブはあんまり飛んでいかなくて、相手前衛のスマッシュを打つチャンスボールになってしまったの。
“どこにくる？”
なっちゃんも後ろに下がった。
パコーンッ！
相手が決めたスマッシュはうちらの間に向かってきた。
「はいっ」
あたしが合図して、思いっきり踏み込んでバックハンドで拾った。
「よしっ！」
全然見えた。
これも祐一たちと特訓したからだね！
サーブも全部見える。

重いけど取れる。
この試合いける！

『3―2』

あと1点・・・

なっちゃんの切れ味すごいカットサーブが入って、相手前衛がクロスに返してきた。
なっちゃんの読みが当たったのか、ローボレーに入って返す。
亜理紗がフォローに走り出してロブで返してきた。
ロブは立て直すためにもあるが相手にはチャンスボール。
あたしはシュートボールを打つと見せかけて短めに軽く返した。
相手の前衛がスライスで短く返してあたしを前へ引きずりだしてきた。
かろうじて拾っって、なっちゃんが後ろに下がった。
亜理紗がチャンスと見て、思いっきりストレートに全国レベルのシュートボールを打ち込んできた。
でも、あたしは読んでいたりして！
もう、あたしは走り出してたんだ。
亜理紗のシュートボールをバックボレーで返して見事にヒット！
ギャラリーも一斉に沸きあがる。
亜理紗も粘って拾ってくる。
そのボールがネットインでコートに入ってきたの。

もう頭真っ白！

「うわぁぁぁぁぁ～！」

目に入ってるボールしか見えてなかったんだ。

ギリでラケットに当たってあたしそのままコートの外まで顔面からスライディング。
すぐさま振り返って、
「なっちゃん！」
「まかせて！」
でも、ひるんだ前衛がボレーミスでネットにかけてしまって、うちらの優勝が決まったの。
「やったぁー！」
「かおりぃ～！」
なっちゃんが飛びついてきた。
「やったね！」
「嬉しいよう！」
なっちゃんうれし泣き。
「かぉ！大丈夫か？」
祐一たちが傷だらけのあたしを起こしにきてくれたの。
「うん、大丈夫。」
「おめでとう！やったな。」
祐一が頭をなでる。
「祐一たちのおかげ。ありがとう。」

「かおり、挨拶いこ。」
挨拶しにネット中央に行く。
「花田さん、大丈夫？」
「うん。」
『3―1で花田ペア』
「ありがとうございました。」
亜理紗と握手をすると、
「羨ましかった。」
「え？」
「いつもテニス楽しそうにやってて。男テニとも仲良くて。どんどん力つけてくる花田さんに追いつかれないように私も必死だった。花田さんのテニス凄い好き。」
「ありがとう。あたしも羨ましかったよ。インハイで通用する凄いボール打って、綺麗で、女らしくて。あたしなんか男っぽいから全然もてたことない。」
「私だってもてないわ。」
「うそ～。またまた。」
「ホントよ。持てはやされるだけ。知らないだけで、花田さんって結構もてるのよ。」
「知らなかった。」
「3年間お疲れ様。」
「亜理紗さんも、お疲れ。」
最後に笑顔で握手ができるなんて思わなかった。

亜理紗もホントは仲良くなりたかったんだって。
遠慮せずに声かけてくれりゃぁよかったのに。
あたしはクラスのみんなのとこに走り寄って、小さいけど優勝トロフィー掲げて

「応援ありがとう！」

そんで、一人一人にハイタッチして。

よく頑張った！

とか、

おめでとう！

って声かけてくれて。
ちょっと泣きそうになっちゃた（笑）

「花っ！」

先生に呼ばれて振り向くと、先生、保健室から救急箱持って走ってきてくれたの。

「お前・・・バカかっ！」

え？
怒られてる・・・？

先生、あたしの腕掴んでベンチに座らせて、傷の手当してくれたの。

「女なんだぞ、少しは考えてボール追いかけろ。こんなに傷だらけになって。」
「だって勝ちたかっただもん。」
「気持ちはわかる。顔に傷つくってまで勝たなくていい。」

本気で怒ってる。

「すみません。」

先生にまかせてたら、あちこち絆創膏だらけ。

「貼りすぎ・・・」
「ようし！さぁ教室帰るぞ！」

先生はみんなを引き連れて、学校に帰って行った。

部室に戻って着替えを済ませて教室に帰る途中。

「優勝できてよかったね！」

なっちゃんが嬉しそうに言った。

「ホント。さっき喋ってたじゃん。」
「うん。おめでとうって声かけてくれたんだ。」

なっちゃん、ほっぺを赤くしてる。
かわいいんだから！

「よかったね！」

なっちゃん、このままうまくいくといいね！

教室に戻ると、待ってましたとばかりにあたしの回りは人だかり。
今まで絡んだことがない男子まで声をかけてくれる。

「花田かっこよかった！」
「ありがと。」

戸惑ってると、まぁこが

「はいはい！順番にね！」

イベント会場の責任者みたいに仕切り始めた。
話してみて意外に面白い人だったとか、クラスの仲間になれた感じ。
ちょっと新鮮。
ゲラゲラ笑ってると、

“ガラガラっ！　ドンっ”

ってすごい音で扉が開いて先生が入ってきた。
一瞬で教室がシーンとした。

「すまない。ちょっと力入れすぎた。席につけー！」

全員席につくと、

「体育祭ご苦労様。花も引退試合よく頑張ったな。この後は学園祭もあるが、受験の息抜きだと思ってほしい。進路の面談も順次やっ

ていくからな。おしまい！」

ＨＲが終って、まぁことファーストフード店で寄り道して、駅でバイバイ。

まぁこはこの後塾なんだって。

あたしは電車に乗っていつもどおりに帰る。

最寄駅の改札出たとこで見覚えある人が立っていたの。

第7話

なんと先生！

あたしに気づいて手を上げた。

「何してんですか？」

「花に用あって待ってた。」

「あたしに？」

「うん。着替えたら出て来れないか？」

「・・・いいですけど。」

「あっちに公園あったな。そこで待ってる。」

「はい。」

あたしに会いにきてくれたの？

あたし、急いで家に帰って着替えてママに

「本屋行ってくる！」

って言って家を飛び出した。

なんでこんなに急いでんだろ。

先生が会いに来てくれたから？

やっぱり好きだから・・・？

あたしに用があるってなんだろう。

駅の近くにある公園に行くと、先生はベンチに座って本を読んでい

た。

「先生。」

「おっ、早かったな。」

「近所ですから。」

「そっか。」

先生は笑いながら本をしまった。

先生のくせに若い格好して。

先生っぽくみえない。

「で、用って・・・？」

あたしが聞くと、先生は両手をあげた。

「え？」

「ハイタッチ。俺だけしてもらってない。救急箱取りに行ってたから。」

え？

それだけのために来たの？

「あ、はい。」

とりあえず、あたしは要望に応えてハイタッチをしてあげた。

パチンって音立てて手と手を重ね合わせた瞬間、先生はあたしの手をギュって握った。

ドキン・・

先生のあったかい手があたしの手を包んでる。

「そっけなくするなよ・・・」

「・・・」

気にしてくれてたんだ。

「クラスの男子と楽しそうに笑うなよ・・・」

「先生？」

「テニス部の男子と肩なんか組むなよ。俺以外の奴に頭なでさせるなよ。」

え？

ずる～いっ！

「先生、何言ってんの？」

「俺・・・ヤキモチ妬いてんだ。」

「先生だってみんなに優しいくせに。頭なでてたじゃん。」

「花。」

先生は手を離すとあたしを抱き寄せた。

「せ、せ、せ、せ、せ、先生？」

うそぉ～！

先生の腕の中にすっぽり。

「あれは花のこと考えながら質問聞いてたんだ。無意識に花と間違

えて頭に手乗っけてた。ごめんな。」
「じゃぁ、みんなにしてるんじゃないの？」
「してないよ！唯一花にごく自然にアピールできる手なんだぜ！」
“ぜ！”って・・・（笑
でも、あたしにだけしてくれてたんだ。
「花にさ、先生のこともっと好きになっちゃうから優しくしないでって言われたとき、どうしたらいいかわかんなかった。」
だって・・・。
「俺は花に好きになってもらいたかったから。優しくすんなとか無理だよ。俺は花が好きなんだから。」
嬉しいけど・・・
でも、亜理紗は・・・？
「担任になったときから気になった。でも、俺教師だし。ましてや担任じゃ、自分のためにも、花のためにも表にだせなかった。」
あたしのために考えてくれてたってこと？
「自分のためって？」
「立場もそうだけど、自分の気持ち押し殺しとかないと授業やＨＲできないよ、先生として。」
そっか。あたしも、授業に身が入らなかったっけ。

「でも、今は私服の花であって清南の花じゃないからな。」
だから着替えてから来いって言ったのか。
「もう、遅いか？村上の彼女になるのか？」
「祐一？」
「授業サボったとき、屋上に一緒にいたし。」
やっぱ見られてたんだ。
探さないわけないと思ったんだ。
屋上なんてまず探すもんね。
「体育祭の日、一緒に遅刻してたし、借り物競争で花を抱っこしてたし。」
「祐一は気持ちに嘘つけないからって。」
「花が好きだって？」
「うん。振られても。」
「もう手遅れかと思った。よかった。」
「先生こそ、亜理紗と噂になってるけど。」
「あぁ。亜理紗か。」
“亜理紗”だって。
「待ち合わせて一緒に出かけてるって。」
「だから花の様子がおかしくなったのか！なんだ。」
「なんだ・・・って」
ちょっとムッとしてみた。
だってあたしにとってすごーい問題だったんだから！

「亜理紗は従兄弟なんだよ。」

はい？

「従兄弟？」

「うん。でかけてたのは・・・」

先生、頭をかきながら照れくさそうに、

「モデルの仕事でな。」

「は？」

「通販雑誌のモデルやってるんだ。顔出てないけどな。」

「マジで？」

すごーい！

「みんなには内緒な。」

「うん・・・」

「だから、避けないでよ。なんも手につかない。」

あたしの右手をギュって握った。

今までの悩みなんてもうどっかいっちゃったよ。

先生が“好き”って言ってくれたからかな。

「花は？」

「へ？」

「もう、おれのこと嫌いになっちゃった？」

首を横に振った。

嫌いになんかなれなかったよ。
いつも先生が気になってた。
傷つくのが嫌で逃げてただけで。

「よかった。卒業までお預けな。」

先生はあたしのオデコにチュって軽くキスをした。
恥ずかしくてまともに先生の顔みれないよ！

「送ってくよ。」

先生があたしのチャリを押して、片手はあたしと。

「1つ、謝らなきゃいけないことがあるんだ。」
「え？」
「掃除・・・ホントはしなくてよかったんだ。」

なんのこと？

「罰ゲームの掃除が決まった日、HRの後、電話あってさ。そちらの学生さんが、この駅で倒れた自転車を一緒に直してくれたって。花だってすぐわかったんだ、ホントなら無しにしてやんなきゃいけなかったんだけど。ごめん。」
「言い訳は無用だってわかってましたから。」
「花と二人で掃除できるって思ったら、無しにできなかった。正直、花が遅刻すんの楽しみにしていた。」

楽しみにしてくれてたんだ！

「先生として最悪。でも許す。」

あたしは笑いながら言った。

そうでなかったら、あたしは先生のこと“好き”になることなかったんだもんね。

「ホント最悪な担任だ。花は、絶対俺の周りに来る生徒の中にいることなかったからな。
話すチャンスがなかった。どうしたら花と話すことできんだろって。
花を知ることができるんだろって。」

そういうの苦手だからね・・・。

先生ね、あたしがちゃんと大学に受かって卒業したらちゃんと付き合おうって。
そこんとこしっかり先生なんだから。

でも!
ちゃんと大学進学決めたもんねー♪
あたしにとって、あの体育祭からもっとクラスの子たちと仲良くなれて、学校生活が楽しくなったんだ!
相変わらず祐一たちとも絡んでます（笑）
卒業旅行もまぁこと沖縄行った!

そんで・・・

「かおり!早くしなさい!」

ママが玄関で叫んでいる。

「は～い！」

きょうは卒業式です！

しっかり寝坊・・・。

空もお祝いしてくれている！

超～快晴！

「花！こんな日まで遅刻か！」

先生にこっぴどく叱られ（笑

卒業式はとってもたいくつだった・・・。

校長先生の話し、相変わらず長い！

祝辞や答辞、卒業証書授与でしょ。

早く謝恩会とクラス会なんないかなぁ。

式が終わって校庭に出ると、後輩達が花道作ってくれてて。

嬉しくてここでようやく涙がでちゃった。

最後に大きな花束もくれて。

「みんなありがとう！これからも頑張ってね！」

一番泣いていたのがあたしだったという・・・（笑

謝恩会は、クラスで担任に送る歌を歌って、バイキングでご飯食べて。

一度解散して、クラスの子の親がやってる居酒屋でクラス会！

もちろんお酒はでないよ。
貸切で使わせてもらったんだ。
みんなで少しずつお金出し合って用意したプレゼントを渡したり、
先生の言葉があって、
学級委員の挨拶、一人一人思い出とか話して自由に談話しながら飲み食いが始まった。
あたしはまぁことテーブルの男子とおしゃべりしながらくつろいでいると、

「花田、ちょっと・・・」
「何？」

呼ばれて座敷の隅に移動。

「あのさ、」
「うん」
「好きです！付き合ってください！」

聞きつけた子が騒ぎ出した。

ちょっと！

その男子は頭下げたまま手を差し出している。

「ちょっと待った！」

別の男子も参戦してきた。

えぇぇぇぇ～？

「僕も、テニスしている花田に惚れました、お願いします！」
右に同じで手を出している。
「ちょっと、悪ふざけ？」
周りは冷やかすし、恥ずかしいから！
「ちょっとまったぁ～！」
今度は誰？
せ・・・先生！
先生マジかよぉ～！って笑いが起こった。
手をあげながらこっちにくる。
「おねがいします♪」
って、女口調で男子の手を握った。
しかも両方に。
周りは爆笑になった。
「先生、こいつはしんないけど俺真面目っすよ。」
一人がむくれると、
「俺もだよ！」
だって。
したら先生ね。

あたしも肩に手をまわして、

「ほう・・・・悪いな。でも、俺の女。手ぇだすなよ。」

って言ったもんだから！

店中がえぇぇぇぇーーーーー？って大騒ぎ。

「いつから！」

誰かが聞くと、

「今から」

「は？」

「卒業したら交際予約済み。」

先生得意げにVサインした。

ずるーぃ！

とか口々にでたんだけど、一人の子が、

「先生偉い！」

って言って拍手し始めたら、みんなも一緒になって祝福してくれた。

まぁこが涙して喜んでくれたよ！

今日から堂々と、彼氏と彼女。

恋する勇気。

“好き”って言う勇気。

泣いたり・・・・笑ったり・・・・怒ったり・・・・

1歩1歩幸せの道を歩んで行こうね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9859c/

先生を独り占め

2010年11月2日03時32分発行